

まとめ

本城 凡夫（香川大学 瀬戸内圏研究センター ゼネラルマネージャー）

[本城先生]

最初に総合論議の時間を持つと申しましたが、私の司会の不手際であまり時間が残っておりません。そこで、私の言葉で本会を締めさせていただきたいと思います。本日講演の4名の先生方から短い時間にもかかわらずたくさんの情報をいただき、本当にありがとうございます。

日向野先生のアサリの講演では、アサリ減少の現状と原因および増産の新技术を私達に提供して下さいました。最後のアサリ養殖に関する新技术は、古い干潟基質からアサリを分離して新しい基質で飼育するということに新規性を含んでいるように思いますし、瀬戸内海でもこの技術が適用できそうです。瀬戸内圏研究センターでは、早速、この新しい技術を取り込んで、島嶼部の浜辺を利用したアサリ増産の展開を図ってみてはどうかと感じた次第です。

反田先生は海の資源の減少問題について、1995年頃をターニングポイントにして話されました。そして、栄養塩と資源との間には食物網を通した複雑なプロセスが存在しており、両者間に直接的な関係は捉え難いとこのこれまでの一般的見解に対して、意外に早く栄養塩濃度の減少が資源の減少に反映している、特に栄養塩濃度と2年後の底曳網漁獲量との密接な関連の提示には驚かされました。今後、瀬戸内海を豊かな海に戻すためにはどのような方策が必要かという観点からも、示唆に富んだ多くの発言があったと思います。

長嶋先生の瀬戸内海と島の話では、いろいろと大事なキーワードが出てきたように思います。里島というキーワードが出てまいりましたし、瀬戸内海には数カ所で自力更生制度の島があったことを私は始めて知りました。最後の方で、リピーターによるOターンの話がありました。瀬戸内圏研究センターでも同様な内容が発表されております。「若者達が島に渡って祭りを手伝い、若者達に島に馴染んでいただく。これによって島に住んでいる老人達が元気になり、その島が活気付く。」という、稲田先生グループの研究成果です。今回の話でも共通した考えが提案されたと思いました。

板生先生の話は、すぐに医療と直結するものだと思います。センサを使って人間の情報を取り出していくということは究極的なヘルスケアになると思います。先ほど実際に離島の診療に従事されている白神先生もヘルスケアモニタリングシステムやクラウドシステムを遠隔地の里山、里島などで効果的に使うことについてお話をされました。原先生からも香川での今後の活用についてお話をいただきました。このようなシステムの実現はそれほど遠い夢ではなく、近い未来に可能になると思うとワクワクします。

このように、本日のお話は非常に内容のあるものでした。瀬戸内圏研究センターはこのような外部からの情報をしっかり受け取って、咀嚼して、知識の糧として地域に貢献して

いくとともに、有用な技術を発信して行きたいと思っています。これからも頑張って推進していきますので、今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。ありがとうございました。